

進化し続ける秘訣



一晩で50枚はあたり前
通算2万5千枚以上を執筆

「夜のピクニック」で吉川英治文学新人賞と本屋大賞を、「ユージニア」にて日本推理作家協会賞長編及び連作短編集部門を、そして「中底の出来事」にて山本周五郎賞を受賞してきた作家・恩田陸さんの小説は、青春モノからSF、ミステリーまで幅広い。

さらに、さまざまな要素が盛り込まれた物語も多く、ジャンルの垣根を飛び越えた小説の可能性を感じさせてくれる。そのジャンルにとらわれない活躍から、恩田作品はこれまで年齢・嗜好ともに幅広いファンを獲得してきた。

そんな恩田さんが小説家という仕事を意識したのは小学生のころ。ロアルド・ダールの本を読んで、「お話を書くという仕事」があると知り、「いつかは小説家になる」と、漠然とした思いが幼心に芽生えた。しかし作家を本気で志したことは社会人になるまでなかったという。

「小説家は社会経験を積んで立派な大人になってから目指すものだ」という勝手な思い込みがありました。だから大学卒業後は一般企業に就職し

年間約200冊の本を読み、

2000枚以上の原稿を執筆している恩田陸さん。

最近では演劇の脚本にも挑戦した。

その、前に進み続けるエネルギーの源には

「仕事は量だ」という強い信念がある。

たんです」。

ところが、酒見賢一さんの『後宮小説』を読んでその考えは「変する。仕事に忙殺され、読書にあてる時間が減る中で読んだ小説だったが、作者が弱冠27歳という若さであることを知って強い衝撃を受けた。

「自分と同じくらいの年齢の人が小説家になっているんだと。かなりの驚きとショックでした」。

そして、突き動かされるように日本ファンタジーノベル大賞を目指して小説の執筆に取りかかった。初め

は仕事と両立させながら書いていたが、締め切りの3週間前に退職し、一気に書き上げた。それが処女作『六番目の小夜子』だ。

惜しくも大賞を逃すが最終候補作にまで残り、退職した翌年の1992年には小説家デビューを果た

した。1998年にはデビュー後に再び就職した会社を退職し、専

業作家に。とにかく食欲に仕事の量をこなしていくと意気込み、仕事は断らず受け続けた。

これまでに恩田さんが書いた原稿の量は通算2万5千枚以上。おかげで執筆のペースが早くなり、一晩で50枚書くのはあたり前。最高で80枚書いたこともあったという。年間

と呼ぶ特別な本棚がある。

「人生の中で特に心に残った本、折に触れて読み返したい本などを主に置いてあります。小学生のころに読んで衝撃を受けた児童書から、『細雪』『坂の上の雲』など、大学生時代に強烈な印象を残したもので、色々ですね。そのほか古本屋さんで見つけた、もう手に入らない貴重な本などもストックしています」。

読書好きの恩田さんは、書店には2日に1度くらいの頻度で足を運んでいる。書店通いのプロとも言える恩田さんだが、店頭で「面白い本」を見つけたコトは何だろうか。

「例えば、人文関係だったらみずす書房さんというように、その版元が得意としているジャンルの書籍だったらハズレがないと思います。あとは、装丁を見ながら感覚で買うこともあって、ずっと棚を見ていたりピントとくる本というのが必ずあるんですよ。そういうのはだいたい正解ですね」。

小説家は社会経験を積んで立派な大人になってから目指すものだという勝手な思い込みがありました。

年間200冊の読書でプロットを蓄積

2、3冊を理想とし、定期的なペースで単行本を刊行してきたその裏では、疲労とストレスで髪の毛が抜けてしまったことがあるほどのハードな生活を送っていた。現在ではそのペースは少し落ち着いているものの、昨年には小説の枠を超えて、「猫と針」という演劇の脚本も手がけるなど、積極的に執筆の幅を広げながら飛躍し続けている。

作家の中でも並々ならぬ本好きとして知られる恩田さんは、多忙な執筆活動の合間に年間200冊、平均すると2日に約1冊のペースで本を読んでいる。自分の手元に置いておきたいという性格から本は増えていくばかりで、平積みされた本が天井

にまで達している部屋もあるとか。「本を読むのは主に、逃避している時(笑)。仕事をしていて行き詰まったり、疲れたなあと思ったら一章だけ読みます。あとは夕食時や寝る前。最近、読んでも内容を忘れてしまうので、なるべくまとめて1日か2日で読みきるようにしています」。

さらに、部屋に積み上げられた本の中には、恩田さんが、殿堂入り。

恩田陸
読んで、読んで、書き続ける

